

## カフカの『新しい弁護士』

——自由への憧れと諦念——

佐々木 博康\*

【要 旨】 カフカの『新しい弁護士』は、1917年2月に執筆され、1920年に刊行された短編集『田舎医者』に収められた散文である。作品の内容は、かつてアレクサンドロス大王の軍馬であったブケファロスが、現代においては人間の弁護士として法律書を読みふけているという奇妙なものである。きわめて短い散文であるためか、さまざまな解釈が並立している。正義の問題、真理の探究、自己実現などが追求されているとするものや、現代人のカリカチュア、あるいは知識人や研究者の諷刺とするものなどがある。しかし、多くの研究者はこの作品の精妙なユーモアを見逃している。この散文は、カフカ自身の自由への憧れとその断念をユーモアとペーソスをもって表現したものである。

【キーワード】 ユーモア 自由 諦念 自画像

### はじめに

カフカの小品『新しい弁護士』は、1917年2月10日ごろ執筆されたと推定されている<sup>1)</sup>。同年9月半ば発行の隔月刊の雑誌「マルシュアス (Marsyas)」の第1巻第1号に掲載され、1920年に上梓された短編集『田舎医者』に収められた。この短編集の巻頭を飾っている。

この作品が書かれたのは、プラハ城敷地内にある錬金術師小路の小さな家である。カフカは、1916年11月末から翌年の4月まで、妹オットラの借りていたこの家を執筆に利用した。それまで住んでいたランゲ・ガッセの部屋が騒々しく集中を妨げたからである。カフカは労働者災害保険局での仕事が終わると簡単な夕食を持ってそこに向かい、真夜中まで執筆し、それから自分の家に帰って寝るという規則的な生活を続けた。

この時期はカフカにとって精神的に比較的安定した時期であった。フェリーツェとは第一次大戦が終わったら結婚する約束ができていたし、またすでに『変身』や『判決』を刊行し、1916年11月にはミュンヘンの書店で『流刑地にて』を朗読するなど、作家としても徐々に評価されるようになってきていた。創作への意欲も高まり、錬金術師小路の家での集中的な執筆となったのである。

『新しい弁護士』はきわめて短い散文であるため、これだけを取り上げて解釈した論文は必

ずしも多くないが、本論ではそれらを参照しつつ、この作品の新しい読み方を提示する。

## I. テクスト

まず最初に作品を筆者自身の訳によって紹介する。

我々は新しい弁護士、ブケファロス博士を迎えた。外見からは、彼がまだマケドニアのアレクサンドロスの軍馬だった時代を思い起こさせるところはほとんど見られない。もちろん、事情に通じている者なら気づくこともあろう。実際、最近私が外階段のところで目にしたのであるが、彼が脚を高く上げ、大理石の階段をカツカツと一段一段上っていったとき、鈍感な廷吏でさえもがいっぱしの競馬通の目で、驚嘆しつつこの弁護士を眺めていたものだ。

大体において、弁護士会は彼の加入をよしとしている。驚くべき洞察力でもってささやき合っている、ブケファロスは現今の社会状況においては困難な立場にあり、それゆえ、もちろん彼の世界的な意義のためにも、とにかく好意的に遇してしかるべきだ、と。現代では——これは誰しも否定できないだろう——偉大なアレクサンドロスに匹敵する者は一人としていない。なるほど、人を殺すことを心得ている者ならたくさんいる。宴会のテーブル越しに友人を槍で突き刺す巧みさにも事欠かない。マケドニアを狭すぎると感じ、フィリッポスを、つまりは父親を罵る者も数多い。——しかし、インドに導いてくれる者は誰もいない、誰も。当時からしてインドの門は到達不可能だったが、その方向は大王の剣によって示されていた。今日では門はどこかまったく別のところへ、より遠く、より高いところへと移されている。方向を指し示す者は誰もいない。剣を帯びている者は多いが、それもただ振りまわすためにすぎない。それで剣に従おうとする者は目をまわすばかりだ。

それゆえおそらく、ブケファロスがしたように、法律書に没頭するのが何といっても一番いいことなのだろう。自由に、乗り手の腿に脇腹を締めつけられることもなく、静かな明かりのもと、アレクサンドロス戦の騒擾を遠く離れて、彼は読書にふけり、我々の古い書物のページをめくるのである。<sup>2)</sup>

これがテキストの全文である。

## II. 歴史的背景

作品の解釈に入る前に関連する歴史的事項を確認しておく<sup>3)</sup>。

「マケドニア」と言われているのはもちろん古代マケドニア王国のことで、「フィリッポス」はアレクサンドロス大王の父、フィリッポス 2 世（前 382～前 336）のことである。当時マケドニア王国は破滅の危機に瀕していたが、23 歳で即位したフィリッポス 2 世は軍隊を強化し、わずか 20 年ばかりのうちに次々に周辺地域を征服していった。マケドニアをバルカン半島随一の強国に育て上げたのは彼の功績である。

フィリッポス 2 世に軍事的成功をもたらしたのは、彼がそれまでの重装歩兵部隊を改革し、5.5 メートルの長槍を持つ独自の密集歩兵部隊を作り上げたこと、そしてこの部隊をもともと

優秀だった騎兵部隊と組み合わせたことにある。カフカの『新しい弁護士』には、「宴会のテーブル越しに友人を槍で突き刺す巧みさにも事欠かない」という表現がある。「長槍」がマケドニア軍の特徴であったことをカフカも知悉していたのかもしれない。また末尾には、「自由に、乗り手の腿に脇腹を締めつけられることもなく」という箇所がある。「古代にはまだ鎧が発明されていなかったの、騎乗のさいに足で踏ん張ることができず、両の太ももで馬のわき腹をしつかりと締め付けねばなら」なかったそうである。そして、「この体勢で馬を自在に操り、しかも槍をもって戦うには高度の訓練を要した」<sup>4)</sup> とのことである。カフカの表現はこのことを踏まえているかもしれない。

フィリッポス2世は、前338年、カイロネイアの会戦でアテナイとテーバイの連合軍を破り、スパルタを除く全ギリシアを実質上の支配下においた。ところが、いよいよペルシャ遠征に乗り出そうという矢先の前336年、娘の婚礼の祝宴で側近護衛官のパウサニ阿斯によって暗殺されてしまう。

フィリッポス2世暗殺を受けてマケドニア王国の王となったのが、当時20歳であった息子のアレクサンドロス3世（前356～前323、在位前336～前323）である。周知のように、アレクサンドロスはギリシアからインダス川に及ぶ空前の大帝国を打ち立て、後に大王と呼ばれることになる。アレクサンドロスの東方遠征によってギリシア文化とオリエント文化が融合し、ヘレニズムの時代を迎えることになったこともあまりに有名である。

このアレクサンドロスの愛馬が「ブケファロス」である。アレクサンドロスはその生涯のほとんどすべての戦闘においてブケファロスに乗って戦った。「ブケファロス」は「雄牛の頭」の意で、これは肩に雄牛の頭の焼き印があったことに由来する。プルタルコスの『英雄伝』にはアレクサンドロスとブケファロスの出会いの逸話が語られている<sup>5)</sup>。アレクサンドロスがまだ十代そこそこの少年だったとき、父のフィリッポス2世の前に、ある商人がブケファロスを引いてきた。荒馬で誰の手にも負えなかったが、アレクサンドロスは馬が自分の影に怯えて騒いでいるのを見抜き、馬を太陽の方に向けて落ち着かせた。それから巧みに乗りこなしたので、周りの人々から歓声が上がった。父は喜びのあまり涙を流し、アレクサンドロスの頭に唇をつけて「お前は自分相応の王国を求めるがいい。マケドニアには、お前のいる場所がない。」と言ったという。

父フィリッポスのこの言葉は、カフカの散文の「マケドニアを狭すぎると感じ」と関連しているかもしれない。ただ、プルタルコスの『英雄伝』の文脈では、フィリッポスの言葉は息子に対するほめ言葉であり、「おまえはマケドニアというちっぽけな国にくすぶるような人間ではない。おまえにふさわしいのはもっと大きな国だ。」という意味に解するのが自然であろう。ところが、カフカの散文では「マケドニアを狭すぎると感じ、フィリッポスを、つまりは父親を罵る者も数多い。」となっており、まるでアレクサンドロスがマケドニアを狭すぎると感じ、そのような小さな国に自分を閉じこめる父親を罵っていたかのように書かれている。ビンダーはカフカの散文のこの箇所を、「歴史的事実の変更」<sup>6)</sup> としている。カフカによるこのような変更には意図的なものを想定することができるよう思われる。つまり、ここにはカフカの父との確執が反映されているのではないかと考えることができるのである。これについては作品のテーマとの関連で後で触れる。

アレクサンドロスと父フィリッポスの関係はいつも良好というわけではなく、非常な緊張関係に陥ったこともあった。プルタルコスには次のような逸話が記されている<sup>7)</sup>。フィリッポス

2世が、重臣アッタロスの姪である若いクレオパトラと結婚することになったときのことである。結婚の宴でアッタロスは皆に向かって、フィリップスと自分の姪の間に「正統な後嗣」が生まれるよう祈れと言った。これを聞いたアレクサンドロスは、「貴様は私を庶出だと思ふのか」と憤激し、盃を投げつけた。すると父のフィリップスは剣を抜いて、アレクサンドロスに打ち掛かろうとした。ところがすっかり酩酊していたフィリップスは転んでしまう。それを見たアレクサンドロスは、「諸君、この方はこれでもヨーロッパからアジアに渡るつもりで準備をなされていたが、座席から座席を渡る間にお転びになっている。」と嘲った。その後アレクサンドロスは、父の許しがあるまでの半年間イリュリアに逃れていた。

断言はできないが、アレクサンドロスの父親に対する直接的な非難の言葉として知られているのが上の言葉しかない以上、カフカが「フィリップスを、つまりは父親を罵る者も数多い。」と書く際に念頭に置いていたのはこのエピソードかもしれない。

アレクサンドロスは、前334年、マケドニアとギリシアの連合軍総司令官としてペルシア遠征を敢行する。小アジアのギリシア諸都市をペルシア軍から解放し、イッソスの戦いではダレイオス3世率いるペルシアの大軍を打ち破る。これによってアレクサンドロスはペルシア帝国の西半分を獲得した。

このイッソスの戦いを描いたものとして有名な「アレクサンドロス・モザイク (Alexander-mosaik)」がある。このモザイクは、19世紀にポンペイの遺跡から発掘されたものだが、制作されたのは前120年から前100年頃とされている<sup>8)</sup>。ビンダーによれば、カフカが通った旧市街のギムナジウムにはこのモザイクの大きな複製がかかっていたとのことである<sup>9)</sup>。カフカの散文の末尾に「アレクサンドロス戦 (Alexanderschlacht) の騒擾を遠く離れて」という表現があるが、「アレクサンドロス・モザイク」は一般に「アレクサンドロス戦 (Alexanderschlacht)」とも呼ばれているし、またカフカ自身がギムナジウムのモザイクのことを「アレクサンドロス戦の絵 (ein Bild der Alexanderschlacht)」<sup>10)</sup>と呼んでいることを考えると、この散文の「アレクサンドロス戦」はイッソスの戦いを指していると考えて間違いないだろう。

アレクサンドロスはシリア、フェニキア、エジプトを征服した後、前331年、チグリス川上流のガウガメラの戦いで再びペルシア軍を撃破し、ペルシア帝国を滅亡に追い込んだ。さらにインド（現パキスタン）に侵入する。インダス川の支流のひとつであるヒュダスペス川で、ボロス王との激戦に勝利した後、前326年、大王とともにインドまでの幾多の戦いをくぐり抜けてきたブケファロスが死ぬ。アレクサンドロスは彼の馬を手厚く弔い、その名にちなんだ町ブケファラを築いた。

ブケファロスが死んだ後もアレクサンドロスは遠征を続けるが、やがて将兵たちがさらなる進軍に異議を唱えるようになる。不断の戦闘と降り続く雨に兵士たちが疲弊しきっていたからである。結局、アレクサンドロスは遠征を中止して戻ることを決意する。これは彼にとって初めての敗北であった。『新しい弁護士』に、「当時からしてインドの門は到達不可能 (unerreichbar) だった」とあるのはこのことを指しているだろう。ただ、アレクサンドロスは実際にはインドに足を踏み入れているのであり、この点も史実とは異なっている。

前323年、バビロンに戻ったアレクサンドロスは突然の熱病に襲われ、33歳で死んだ。ブケファロスが死んでから3年後のことである。

### Ⅲ. これまでの解釈

カフカの『新しい弁護士』の内容は、かつてアレクサンドロス大王の軍馬であったブケファロスが、現代においては人間の弁護士として法律書を読みふけているという奇妙なものである。私たちはこの話をどのように理解すればよいのだろうか。これまでの主な解釈を概観してみよう。

ヴェルナー・クラフトは、剣によって目標に到達しようとする過去の時代、すなわちアレクサンドロスが生きた神話的英雄の時代が批判されているという<sup>11)</sup>。クラフトによれば、カフカは過去の時代と対照させながら、読書に没頭する現代のブケファロスを、普遍的な「正義」について沈黙考し、それが実現される時を待っている存在として肯定的に描いている<sup>12)</sup>。こうしてクラフトにおいては、作品のテーマは剣＝野蛮の否定と認識をこととする知識人の礼賛へと単純化されてしまう。

カール＝ハインツ・フィンガーフトは、過去が否定的に見られているのではなく、逆に現代がその「方向性のなさ」のゆえに批判されているとする<sup>13)</sup>。ただ、書物に沈潜するブケファロスについてはクラフトと同様に肯定的で、書物の中に「正しい道」、永続的な「真理」を探求している存在とされている。

現代が批判されていると考える点、またブケファロスを肯定的に見ている点では、ゲルハルト・ノイマンも同様であるが、作品のテーマは「自己実現」とであるとされる<sup>14)</sup>。ノイマンによれば、神話的・古代的な力による社会秩序と現代の法と判決による社会秩序が対照されることによって、現代における人間の自己実現の可能性が問われている。生きる方向が明確であったアレクサンドロスの時代とは異なり、法律書によって組織化された現代においては、方向性は見失われ、自己実現は困難なものとなる。しかし、ブケファロスは「本を読む人 (als Leser)」として自己を確立する。古い書物を読むことは「内部に向かってアレクサンドロスの遠征」を敢行することを意味する。ノイマンは、ブケファロスは、「行動し判決を下す者たちの世界」における言語に携わる者として、理想化され、正当化されていると解釈する。

クラフトもフィンガーフトもノイマンもブケファロスをきわめて肯定的な存在と捉えているが、ペーター・U・バイケンとはまったく逆の見方をしている<sup>15)</sup>。バイケンにとっては、古い書物に没頭しているブケファロスは、生の方向を見失い、意味のある活動ができなくなっている現代人のカリカチュアにすぎない。

池内紀と若林恵による『カフカ事典』も、ブケファロスを否定的な存在と見ている<sup>16)</sup>。アレクサンドロスの時代とは異なり、現代のブケファロスは法律上の闘いを戦っている。しかし、「この弁護士の法をめぐる活動は、机上で静かに燃える灯のもとに行われるのみ」で、法典との格闘によってすべてのエネルギーを消耗しつくしてしまう。「馬の名前と姿を持った弁護士という諷刺によって、内面に沈潜することで外面的な困難から身を守る者の態度が皮肉られている」のである。つまり、書物に逃れる知識人を卑小な存在として皮肉っているのがこの作品ということになる。

クラフトを除いて、フィンガーフト、ノイマン、バイケン、池内・若林らは、この作品ではアレクサンドロスの時代との対照において現代が批判されていると解釈しているが、谷口茂は、「決断と行動とが支配した、危険だが活気のあった古代と、法律に寄り縋っている、安全だが無気力な現代」とが、ただ「対比的に提示」されているだけで、過去の時代によって現代を

批判しているわけではないと考える<sup>17)</sup>。

この点においては、ヴァルター・H・ゾーケルも同様である<sup>18)</sup>。ゾーケルによれば、ブケファロスにとっては現在の状況は必ずしも否定的なものではない。というのも、かつては主人であるアレクサンドロス大王によって偉大な目標を与えられていたが、そこには「自律性」はなかった。現代では命令する主人を欠いて目標を失ってしまったが、その代わり、「平和、静寂、自由といった恩恵を受け取った」<sup>19)</sup>からである。この作品では、「命令を与え、生きることの意味を授けてくれた動物の隷属関係のほうが良かったのか、それとも命令されない代わりに生きる意味も奪われてしまった人間的自律の方が良いのか」<sup>20)</sup>という問題が扱われている。ゾーケルは、「現代は、諦めの気持ちを持ってではあるが、受け入れられている」<sup>21)</sup>と結論づける。

一方、ペーター＝アンドレ・アルトは、これまでとはまったく別の次元からこの作品を解釈する<sup>22)</sup>。アルトはニーチェの学者批判を引き合いに出しつつ、この作品は学者の研究を皮肉ったものであるという。ブケファロスが「古い書物」を読んでいることからわかるように、アレクサンドロスの時代の偉大な行為は、現代では書の研究に置き換えられた。古い書物は現在の生を破壊し、私たちに「致命的な硬直化」をもたらしている。かつての英雄的時代への道を閉ざすのは、二次的な事実を伝えるだけの古い書物を読むことである。このように、アルトはこの作品に英雄的行為と読書の対立を見、後者を否定的に捉えるのである。

以上概観してきたように、アレクサンドロスの時代と現代との関係にしても、書物を読むブケファロスの存在にしても、さらには作品全体のテーマにしても、さまざまな解釈が並立している状況である。以下、作品を仔細に検討していくことで、筆者自身の解釈を提示する。

#### IV. 作品解釈

##### 1. 第一段落——ユーモア——

1912年に執筆された『変身』と同じく、『新しい弁護士』においても主人公が変身している。ただ、『変身』では人間が動物に変身するが、ここでは動物から人間への変身と方向が逆である。しかも変身がいつ起こったのかさえないではない。

『変身』では、「ある朝不安な夢から目を覚ましたグレゴール・ザムザは、ベッドの中で自分がおどろおどろしい虫に変身しているのに気づいた」<sup>23)</sup>と、変身の事実が坦々と述べられているのに対して、『新しい弁護士』ではもっと手が込んでいる。

「我々は新しい弁護士、ブケファロス博士を迎えた。外見からは、彼がまだマケドニアのアレクサンドロスの軍馬だった時代を思い起こさせるところはほとんど見られない。」

「彼はかつてマケドニアのアレクサンドロス大王の軍馬だった」と単純に述べるだけでも読者を十分とまどわせるのに、「軍馬だった時代を思い起こさせるところはほとんど見られない」という否定の形式を用いることによって、「彼はかつて軍馬だった」という、読者にとっては受け入れがたい前提をいっそう強固にしている。非現実的事柄がいつのまにか既定の事実となっているのである。いわば、この文は読者に「彼はかつて軍馬だった」ということを事実として認めることを強制しているとも言えるのである。

現代の人間を過去の英雄の軍馬と結びつけるのは突拍子もない発想であるが、私たちがメル

ヘンを読む時と同じようにこのような非現実の前提を受け入れるなら、現実と非現実の不可思議な結合がもたらす奇妙なユーモアに私たちは思わず苦笑せざるを得ないだろう。新しい弁護士がアレクサンドロスの軍馬だったという語り手の荒唐無稽な陳述と、それに付加された「外見からは」とか、「思い起こさせるところはほとんど見られない」などのきまじめな表現の落差がこのおかしさの原因である。語り手はさらに、「もちろん、事情に通じている者なら気づくこともあろう」と、あくまで不条理な前提を重々しく主張し続ける。そしてこの強引ともいえる語り手の戦略に乗せられることを読者が受け入れるとき、カフカの世界は楽しいものになる。

人間が軍馬だったことを読者に確実に納得してもらうために、語り手は自分が「目にした」という具体的な証拠を挙げる。つまり、「鈍感な廷吏」でさえブケファロス博士が馬だったことに気づいたよ、と読者にたたみかけるのである。「彼は競馬通」だったからね、とユーモアを忘れない。「驚嘆しつつこの弁護士を眺めていたものだ」に読者は苦笑せざるを得ない。なぜなら人間が馬であったことを発見して「驚嘆」しない者はいるはずがないからである。まず馬が人間になったという非現実的な事柄を事実として日常的現実にもぎれこませ、続いて日常的現実を生きる廷吏の側にあらためてこの奇妙な非現実を発見させることでよりいっそう事実化してしまおうという、実に巧妙な叙述方法である。しかしこれによって非現実と現実が入り交じったカフカの世界が現出することになり、そこに独特のユーモアが生まれるのである。「彼が脚を高く上げ、大理石の階段をカツカツと一段一段上っていったとき」と語り手が語る時、読者の脳裏に浮かぶのは、人間と馬とが二重写しになった奇妙なイメージである。

## 2. 第二段落——現代批判——

語り手の軽快なユーモアは第二段落に入っても続く。「鈍感な廷吏」ばかりでなく、弁護士会に所属している人々も、加入したばかりの弁護士がアレクサンドロス大王の軍馬であったことを、「驚くべき洞察力でもって」見抜いているとされる。人間が馬であることはあり得ないのだから、同僚たちがブケファロス博士が馬であったと見抜くためには、もちろん「驚くべき洞察力」が必要であろう、と読者は苦笑せざるを得ない。

ブケファロスが「現今の社会状況においては困難な立場に」あるのも、現代という時代がアレクサンドロスの時代と大きく異なっている以上当然のことであるが、この当然さをしかつめらしく語る語り口がおかしさを生んでいる。弁護士たちが、「アレクサンドロスの軍馬だった彼のような人は現代では生きにくかろう。それに彼は世界史に残る偉業を達成した存在だし……」という理由でブケファロス博士に好意的だというのも滑稽である。遠く離れた二つの時代を連続して生きるという、あり得ないことが事実となったために生じた滑稽さである。「現今の社会状況においては (bei der heutigen Gesellschaftsordnung)」, 「世界史的な意義のためにも (wegen seiner weltgeschichtlichen Bedeutung)」, 「好意的に遇してしかるべき (Entgegenkommen verdient)」などの堅い表現が効果を發揮している。また、そのような講演調の表現の中に、「それゆえ (deshalb)」, 「もちろん (auch)」, 「とにかく (jedenfalls)」などの、ためらいを無理に抑え込む言葉が混在しているのは絶妙でもある。弁護士たちがブケファロスをどう扱っていいのか測りかね、逡巡しているさまが私たちの目に浮かぶ。「ブケファロス博士は馬であった」とあくまで主張し、二つの時代を無理矢理つなげてしまう語り手の強引さに、登場人物までもがとまどいを隠せないでいるかのような印象を受ける。

第二段落からは、この散文のテーマが見えてくる。「現代では……偉大なアレクサンドロスに

匹敵する者は一人としていない」という文が示すように、現代という時代に対する批判がカフカの意図なのである。わざわざ「アレクサンドロスの軍馬」という大時代的なものを持ち出してきた理由は、アレクサンドロスの時代と現代とを対照するためである。では「現代」はどのような点で批判されるのだろうか。

まず語り手は、アレクサンドロスの時代と同じように、現代でも「人を殺すことを心得ている者ならたくさんいる」と述べる。これは実際に殺人を犯す人間が現代でも依然として存在すると解釈される場合もあるが<sup>24)</sup>、むしろ人間関係において相手に致命的な心の傷を負わせることが常態化している現代を諷刺するものと受け取った方がよいだろう。続く、「宴会のテーブル越しに友人を槍で突き刺す巧みさにも事欠かない」という文も同様である。これは社交の場で言葉の「槍」によってテーブルで向かい合った相手に痛烈なダメージを与えることを皮肉っぽく、ユーモラスに表現しているものと思われる。

また、現代人の中には「マケドニアを狭すぎると感じ、フィリッポスを、つまりは父親を罵る者も数多い」と言われる。つまり、アレクサンドロスと同じく、自分を狭い「マケドニア」に閉じこめている父親を非難している現代人もたくさんいる、という意味だろう。「マケドニア」とは、自分が具体的に生きている世界——たとえばカフカの場合であればプラハ——と解することができる<sup>25)</sup>。すでに述べたように、この箇所は史実と異なる。父親のフィリッポスが息子のアレクサンドロスを狭い世界に閉じ込めたとは言えないからである。ただ、ここにカフカ自身が感じていたプラハでの生活の息苦しさ、および強権的な父親から受ける圧迫感が反映していると見る<sup>26)</sup>のは妥当であろう。

アレクサンドロスの時代と同じような人間は現代にも多い、といわば茶化するように諷刺しつつ、現代の決定的な問題は、大きな目標を示すアレクサンドロスのような存在がいないことであると語り手は言う。「インドに導いてくれる者は誰もいない、誰も」、「その方向は大王の剣によって示されていた」、「方向を指し示す者は誰もいない」と何度も強調される。そして最後に、「剣に従おうとする者は目をまわすばかりだ」と再び冗談を飛ばして第二段落は終わる。

大王の剣に従えばよかった時代、すなわち人生が単純で生きる目標が明確であった時代と、生の方向が見えなくなってしまう、社交の場で互いに傷つけ合うような息苦しい人間関係の中や、自分を狭い世界に閉じこめる父親＝権力者の圧迫の下で生きなければならない現代とが対比される。広い自由な世界で目標に向かってまっしぐらに突き進むアレクサンドロスの時代の生と、閉塞状況で窒息しそうになっている現代の生との対照である。

### 3. 第三段落——どう生きるのがいいのか——

最後の第三段落では、アレクサンドロスの時代からはるかに遠ざかってしまった現代においては、ではどのように生きるのが最善なのかが述べられる。「法律書 (Gesetzbücher) に没頭する」というのがその答えである。「おそらく (vielleicht)」や「何といっても (wirklich)」などの表現は、「法律書に没頭する」ことを語り手が本当には「一番いいこと (das Beste)」とは思っていないことを示している<sup>27)</sup>。ただ、現代では他に道はないのである。エネルギーに満ちあふれる軍馬だったブケファロスが、狭い書斎に閉じこもって本を読んでいる姿は哀れを誘うが、それもやむを得ないのである。「自由に」と言われるが、この自由はアレクサンドロスの時代の自由とは異なる。それは、さまざまな法律によってがんじがらめにされた世界の内部でのささやかな自由にすぎない。もはやアレクサンドロスの時代ではないのだから、過去の自由



な時代への郷愁などは振り払って、現代社会で自分に割り当てられた弁護士としての仕事に集中して生きていくしかない、諦念とともに語られてこの散文は結ばれる。

新しい弁護士がアレクサンドロスの軍馬であったという途方もない前提から陽気な調子で始まったこの散文は、こうして最後はペーソスと諦念でもって終わる。

#### 4. カフカの自画像としてのブケファロス

弁護士のブケファロス博士は、書類の山に埋もれ事務的な仕事に翻弄される現代人のカリカチュアであるが、同時にまたカフカの自画像でもあるだろう<sup>28)</sup>。カフカは弁護士ではなかったが、法学の博士号を持ち、労働者災害保険局で日々法律の実務に従事していた。またすでに述べたように、「マケドニアを狭すぎると感じ」という表現には、生涯を通じてプラハからの脱出を夢見ていたカフカの思いが込められていると考えられる。「父親を罵る者も数多い」も、カフカの父親との確執を想起させる。

労働者災害保険局で日々法律に関わる仕事に忙殺されるカフカにとって、「自分はかつてアレクサンドロス大王の軍馬だったんだぞ」と空想してみることは楽しいことであろう。労働者災害保険局の守衛の前を通るとき自分に向けられるまなざしを、「いっぱしの競馬通の目で、驚嘆しつつ」自分を眺めているまなざしであると空想することは楽しいことであろう。この散文はこのような発想から生まれていると思われる。仕事への不満から出発して浮き浮きするような空想に遊んだのがこの散文であると言えようか。

だが、結局はすべては空想にすぎないのであって、もうアレクサンドロスの時代ではないのだから、現代では法律書を頼りにこつこつやっていくしかないのだと自分を慰めるしかない。

「法律書に没頭するのが何といっても一番いいことなのだろう」には、そのようなカフカの自己憐憫的な、あるいは自嘲気味の思いが表現されている。現実的な諦念とともに空想の風船はしぼむ。カフカはこの散文において自身を戯画化しているのである。

#### 5. なぜ馬なのか

だが、ブケファロスがカフカの自画像であり、『新しい弁護士』がカフカ自身の日常生活における自由の欠如の感覚から生まれたものだとしても、なぜアレクサンドロス本人ではなく、彼の馬を持ち出したのだろうか。自由を際立たせるためならアレクサンドロス大王を持ち出す方が、読者の共感を得やすいはずである。「もし自分がアレクサンドロス大王だったら」ではなく、「アレクサンドロス大王の馬だったら」というカフカの発想はどこから来ているのだろうか<sup>29)</sup>。

それは、カフカが法律と弁護士の関係をアレクサンドロスと軍馬の関係になぞらえているからだと思われる。乗り手の指示に従って動くのが馬である。法律に従うのが弁護士である。法律と弁護士の関係を主従の関係にとらえ、別の時代に置き換える発想によってアレクサンドロスとその馬が持ち出されたのである。一方ではアレクサンドロスが指示を下し、他方では法律が道を指示する。そして、「大王の剣」が進むべき道を示した勇壮な英雄の時代との対照において、法律に導かれる現代の生の卑小さが際立たせられる。「今日では門はどこかまったく別のところへ、より遠く、より高いところへと移されている」と言われるのは、複雑に入り組んださまざまな法律が現代を生きる私たちの生の目標を見えなくしているからである。

## むすび

以上見てきたように、『新しい弁護士』のテーマとなっているのは自由への憧れと諦念である。主人公がかつてアレクサンドロス大王の軍馬だったという途方もない設定によって、閉塞した現代の生とそこでともかくも生きていかざるをえない人間のありさまが、独特のユーモアとイロニー、また苦いペースととともに照らし出されるのである。

『新しい弁護士』はカフカの戯画化された自画像の軽いスケッチと捉えるべきであり、この散文から正義の実現、真理の探究、自己実現などといったあまりにも深遠なテーマばかりを読み取ることは、むしろこの散文が指向しているものからかけ離れることになる。この作品の陽気で軽やかな調子をそのまま受け取り楽しむことが、この散文に対する第一義的な対し方であると思われる<sup>30)</sup>。

カフカが初めて出版した短編集『観察』(1912年刊行)に収められた散文では、人間の孤独とそこからの脱出願望、自由の希求、別の世界への移行などが描かれており、そこにはかなたへと向けられた視線があった。ところが、短編集『田舎医者』に含まれる短編、特に『新しい弁護士』、『天井桟敷にて』、『アカデミーでのある報告』などでは、自由は過去のものであったり、単なる幻想であったり、苦い諦めとともに言及される場合が多い。脱出する場所はどこにもなく、現実を受け入れ、今いる場所でなんとか生きていくしかないという諦念が作品の基調になっている。

カフカは1916年の7月にフェリーツェと一緒にマリーエンバートで休暇を過ごし、結婚の約束をした。正式に婚約が交わされたのは、それから1年後の1917年の7月である。『新しい弁護士』、『天井桟敷にて』、『アカデミーでのある報告』が書かれたのは、以上の二つの夏を挟む冬と春のことである。作家として生きることと結婚してよき家庭を築くことはどうしても両立し得ないという固い信念を持っていたカフカにとって、フェリーツェとの結婚が決まったことは一方では確かに喜びではあったろうが、他方では作家としての自由の断念でもあったはずである。同じ「自由」をテーマとした作品を書きながら、『観察』と『田舎医者』の両短編集の基調が異なるのは、上のようなカフカ自身の生活状況が反映していると思われる。

## 註

- 1) Kafka, Franz: Drucke zu Lebzeiten. Apparathand. Hrsg. v. H.-G. Koch, W. Kittler und G. Neumann, Fischer 1996, S. 316.
- 2) Kafka, Franz: Drucke zu Lebzeiten. Hrsg. v. H.-G. Koch, W. Kittler und G. Neumann, Fischer 1994, S. 251f.
- 3) 歴史的事項については、主に森谷公俊『アレクサンドロスの征服と神話』(講談社, 2007)を参考にした。
- 4) 森谷, 上掲書, 63-64頁。
- 5) 『プルターク英雄伝』(河野与一訳) 岩波書店, 第9巻, 1965年, 13-14頁。
- 6) Binder, Hartmut: Kafka Kommentar zu sämtlichen Erzählungen. Winkler 1977, S. 207.
- 7) 『プルターク英雄伝』, 17-18頁。また, 森谷, 上掲書, 377頁。
- 8) 森谷, 上掲書, 327頁。
- 9) Binder, a. a. O., S. 204.

- 10) Kafka, Franz: Nachgelassene Schriften und Fragmente II. Hrsg. v. Jost Schillemeit, Fischer 1992, S. 133.
- 11) Kraft, Werner: Franz Kafka. Durchdringung und Geheimnis. Suhrkamp 1972, S. 13-15.
- 12) クラフトは、「ブケファロスは……正義の世界標準時にいて読書をしている。彼は待っているのだ。」(Kraft, a. a. O., S. 15) と述べている。
- 13) Fingerhut, Karl-Heinz: Die Funktion der Tierfiguren im Werke Franz Kafkas. Offene Erzählgerüste und Figurenspiele. Bouvier 1969, S. 100-102.
- 14) Gerhard Neumann の解釈は, Hartmut Binder (Hrsg): Kafka-Handbuch in zwei Bänden. Kröner 1979, Bd. 2, S. 329-331 参照。
- 15) Beicken, Peter U.: Franz Kafka. Eine kritische Einführung in die Forschung. Athenäum Fischer Taschenbuch 1974, S. 295.
- 16) 池内紀／若林恵共著『カフカ事典』三省堂, 2003 年, 126 頁。
- 17) 谷口茂『フランツ・カフカ論』明星大学出版部, 1983 年, 258-9 頁。
- 18) Sokel, Walter H.: Kafka's Law and its Renunciation: A Comparison of the Function of the Law in "Before the Law" and "The New Advocate" (In: Walter H. Sokel, Albert A. Kipa, Hans Ternes (Hg.): Probleme der Komparatistik und Interpretation. Festschrift für André Gronicka zum 65. Geburtstag am 25. 5. 1977, Bouvier 1978, S. 193-215). 邦訳は, 「カフカの法と法に対する断念——『法の前』と『新任弁護士』の中で法が果たしている役割に関する比較」(『カフカ論集』同学社, 1987, 35-70 頁)。
- 19) Sokel, a. a. O., S. 209.
- 20) Ebd.
- 21) Sokel, a. a. O., S. 214.
- 22) Alt, Peter-André: Franz Kafka. Der ewige Sohn. Eine Biographie. Beck 2005, S. 513-515.
- 23) Kafka, Franz: Drucke zu Lebzeiten. Hrsg. v. H.-G. Koch, W. Kittler und G. Neumann, Fischer 1994, S. 115.
- 24) たとえば『カフカ事典』では, 「かつて大王は陶酔状態で友人を殺したことがあったが, 現代社会はいまだにその暴力の手段は心得ているものの……」(126 頁) と述べられている。また, クラフトは剣を振り回すことを「近代史上のあらゆる戦争」と結びつけている。Kraft, a. a. O., S. 15.
- 25) クラフトも「マケドニアはプラハである」と述べている。Kraft, a. a. O., S. 14.
- 26) ビンダーの<Philipp, den Vater>の注釈を参照のこと。Binder, a. a. O., S. 207.
- 27) Sokel, a. a. O., S. 213.
- 28) フィンガーフートも, この物語を「自分の職業に対するカフカの諷刺 (Satire)」(Fingerhut, a. a. O., S. 101)として解釈できると指摘しているが, 詳しい説明はない。付言すれば, フィンガーフートはこの作品を三つの次元で理解している。一つは, ブケファロスは法律家であったカフカ自身を諷刺する人物であるという伝記的解釈である。第二に, この作品は「同時代の社会の方向性のなさ」を批判したものであるとする。そして, 書物に沈潜するブケファロスは, 本の中に「正しい道」, 永続的な「真理」を探求している存在とされる。第三の理解は, アレクサンドロスとブケファロスに, 「前へと突き進む力」と「臆病で後戻りする力」の「二つの対立する世界諸力」が象徴されていると見るものである。フィンガーフートによれば, かつてはアレクサンドロスという前へと進む力が支配したが, 現代ではブケファロスという後戻りする力が優勢になった。馬の人間化は, このような後戻りする力が社会的に解放されたことを示しているとする。第三の理解はベンヤミン (Walter Benjamin: Franz Kafka. In: Gesammelte Schriften. Hrsg. v. Rolf Tiedemann und Hermann Schweppenhäuser, Suhrkamp 1977, Band II, S. 409-438) を参照したものだが, ブケファロスがなぜ「臆病で後戻りする力」なのかが不明であり, 十分な説得力を持っているとは言い難い。
- 29) ちなみに, カフカは馬好きで, しばしば競馬を見に行っている。また, 短編『田舎医者』を始め, 馬が登場するカフカの作品は非常に多い。

- 30) この意味で、アレクサンドロスの時代と現代との「距離から生ずるユーモアとペーソス、それがこの作品の文学的滋味である」(谷口, 上掲書, 259 頁)とする谷口の寸評は、この作品の本質を的確に捉えていると言えよう。

## Freiheit in *Der neue Advokat*

—Kafkas Sehnsucht und Resignation—

SASAKI Hiroyasu

### Abstract

Die vorliegende Arbeit ist eine Interpretation von Kafkas kurzem Prosastück *Der neue Advokat*. Das Werk wurde 1917 verfasst und in die 1920 veröffentlichte Sammlung *Ein Landarzt* aufgenommen. Ein besonderes Augenmerk bei der Auslegung wird dem im Werk ausgedrückten Humor gewidmet.

Der Text beginnt mit der seltsamen Voraussetzung, dass der Advokat Bucephalus als Hauptperson einst ein „Streitroß“ des Großen Alexanders war. Damit wird die Gegenwart dem Zeitalter Alexanders gegenübergestellt. Da dieses als eine Ära der Freiheit, in der das Leben einfach und das Lebensziel der Menschen noch klar war, bezeichnet wird, kommt hierdurch Kafkas Sehnsucht nach Freiheit einerseits und seine Kritik an der Gegenwart andererseits zum Ausdruck: das Leben der Menschen ist nun durch allerlei Gesetze geregelt und normiert, und die Richtung des Lebens ist nicht mehr zu durchschauen.

Bucephalus soll nun als Advokat in Gesetzbüchern versunken sein. Die Parallele zu Kafka selbst ist so groß, dass man hier von einem Selbstporträt sprechen kann. Kafka schildert, wie der Advokat Bucephalus auf die frühere Freiheit, die er zu Zeiten Alexanders genossen haben soll, nun verzichten muss. Diese Äußerungen beziehen sich auf den Verzicht Kafkas auf seine eigene Freiheit, was in der resignierten Stimmung am Ende des Werkes zum Ausdruck kommt.

**[Key words]** Humor, Freiheit, Resignation, Selbstporträt